

福岡県におけるフリーストール牛舎利用農家の意向調査

城内 仁・山下克之・家守紹光(福岡県農業総合試験場)

Hitoshi JONAI, Katsuyuki YAMASHITA and Tsugumitsu KAMORI: Investigation on the Management for Free Stalls in Fukuoka Prefecture

近年、フリーストール飼養方式に関心が集まっているが、これら農家の実態を把握し、今後の農家指導の資料とするために意向調査を行った。

1. 調査方法

9戸の農家に対しアンケートと現地調査による聞き取りを1991年12月～'92年1月に行った。調査項目は、フリーストール方式の採用理由、情報源、改善点、問題点とした。

2. 結果及び考察

1) 対象農家の概況 大部分の農家が過去2年以内の建築であり、古いものは1985年のはじめに建築されていた。経産牛の規模は60頭前後で、ストール数から、将来は100頭前後を想定していた。パーラーのタイプは、ヘリンボーン、アプレスト、ロータリーであった。ストールの材質は、土、木、タイヤ、マット、コンクリート等が利用されていた。除糞のタイプは自動スクレパーとショベルローダによる搬出であった。

2) フリーストール採用の動機 規模拡大、牛の健康を考へて、搾乳環境の改善のため、労力の軽減・省力化のため及び消費者イメージの向上のためといったものが挙げられた。

3) 情報源 情報は、酪農雑誌から基礎的知識を入手し、個人また農協等の研修・視察によりフリーストール農家を見学し、農家から直接ノウハウを学ぶという手順をとるものが大部分であった。

4) 改善された点 大きく分けると人側の労力の軽減と牛側の健康に関するものとなった。人側ではパーラー搾乳、給飼・除糞の機械化により、作業が効率的になっていた。牛側では、環境が明るく、通風が良好になったという点と、乳量・乳質及び繁殖成績の向上であった。

5) 問題点 建築コストや資金的な問題、牛群や個体管理の問題、糞尿処理問題といった、フリーストール牛舎に限らず酪農経営上生じてくるものが挙げられた。また、聞き取りによる調査では、特定のパーラー形式では、泌乳性が斉一でないと効率が悪い。搾乳方法や乳房の管理は以前と変わりが無い。搾乳機器のメンテナンスにメーカーの技術レベルが伴わない。フリーストール農家同士での情報交換がほとんどされていない等の問題が示された。

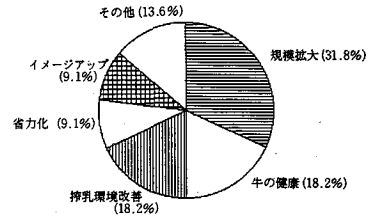
以上のように、現時点では酪農家自身はほぼ満足できる状態であるといえるが、依然として不十分な点が残っている。そこで、将来のフリーストール建築農家に対しては現在の事例を含めて更に調査を継続し、また、既存

農家に対しては、情報交換の場を提供していくことが必要と思われる。

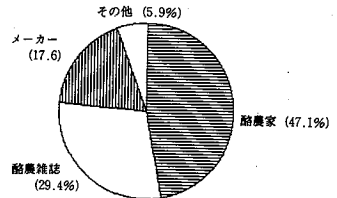
第1表 フリーストール農家概況

農家名	A	B	C	D	E	F	G	H	I
建築年	H1	S61	H1	H3	H3	H3	H3	H3	S60
経産牛数	42	55	35	57	48	50	65	40	60
育成牛数	30	45	23	21	34	30	25	14	20
パーラータイプ	H4W	H6W	H4W	H5W	A6	A6	A6	H4W	R12
ストール数	54	100	48	100	56	42	44	46	86
ストール材質	土	木	土	タイヤ	コン	タイヤ	土	マット	タイヤ
除糞タイプ	スクレバ	スクレバ	スクレバ	ローダ	ローダ	ローダ	ローダ	ローダ	ローダ

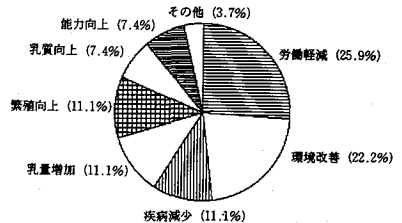
注) a: Hはヘリンボーン, Aはアプレスト, Rはロータリー, Wは複列



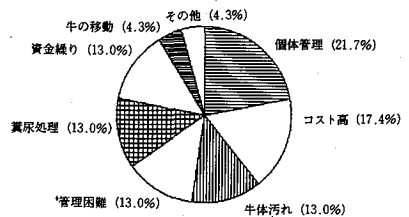
第1図 フリーストール採用の動機



第2図 情報の入手先



第3図 フリーストール採用による改善点



第4図 フリーストール採用による問題点